

## 都市政策・地域経済ワークショップ2 第4回 議事録

【テーマ】 創造都市と大阪

【講師】 大阪市立大学名誉教授 佐々木雅幸様（担当教員：池田先生）

【日時】 2024年10月18日（金）18:30～20:30

【場所】 大阪公立大学大学院 都市経営研究科 梅田サテライト 101 教室

【参加者】 都市政策・地域経済コース M1 学生 他

### ■ 講義概要

テーマ 創造都市と大阪

■ 講師プロフィール 大阪市立大学名誉教授

### ■ 講義内容

テーマ 創造都市と大阪

本日は、創造都市という考え方がどのように広まってきて、日本の中でどんなふうに関展してきたのかということについてお話をします。

2000年に、イギリスのチャールズ・ランドリー氏が、クリエイティブシティーに関する書籍を発売し、ヨーロッパの学会で広がりを見せました。

私は、2001年に「創造都市への挑戦」という書籍を発売しました。創造都市とは、市民一人一人が創造的に、働き、暮らし、活動する都市ということです。都市が創造的であるという場合、当然、そこに住んでいる人たち、つまり市民一人一人がまずは創造的に働き、次に暮らす、そして活動するということが大事になってきます。この働き、暮らし、活動するという3つの領域については、ドイツの哲学者ハンナ・アーレントが言っており、それに準じています。市民の創造的な活動が、文化や産業を支えるということに繋がっていきます。

クリエイティブミリューといますが、創造の場というものを都市の中にたくさん作り出していくことが大事だということで、私たちが創造都市を提唱して15年ほどしてから、経団連でも、Society5.0を創造社会と位置づけています。

生産と消費と流通において、20世紀と21世紀以降の社会では分水嶺があります。20世紀は大量生産、消費も流通も大量性に従い、産業都市、マスツーリズムという世界です。一方、21世紀は、市場に合わせて変化するフレキシブルな生産で、個性的で文化的な消費が普及します。大量生産は減ってゆき、アート思考、デザイン思考の流れへ繋がっていきます。まさに、工業社会から創造社会への変化を見ることになります。ツーリズムもクリエイティブ・ツーリズムという形に変化していきます。

このように、創造都市政策論を提唱したチャールズ・ランドリー氏の功績は、大変大きなものがあったと思います。彼の年齢は私より1つ上ですが、非常にユニークな人物で、7か国語ぐらい話します。当大学院を作った時に彼を最初に招聘しました。その年、創造都市研究科という学科を作りましたが、英語名称を決める際、Graduate School for Creative Citiesとしました。これは非常に海外では好評で、私が英語の名刺を出すと、皆さん驚いていま

した。世界で最初の創造都市を目指す研究科となりました。

イギリスのトニー・ブレア首相時代に労働党が掲げたのが、Creative for the future という将来に向けてクリエイティブな社会をつくろうという政策です。創造産業の発展を推進し、ロンドンでは Creative London という施策として、Cultural Olympiad というオリンピック文化プログラムを実施しました。スポーツだけではなく文化プログラムを作って、文化のオリンピックを実施することで、2012 年のロンドンオリンピック成功に結びつけています。世界中からアスリートを呼ぶだけではなくて、世界中からアーティストを呼んだという形で、それをイギリス全土に広めたのです。Creative London の施策で、ロンドンはどんどんアート色の強いまちになっていきました。この施策を、東京オリンピックでもやろうとして、私も文化庁に働きかけましたが、コロナや代理店問題などで、うまくいかなかった。もしうまくいってれば、世界に大きな衝撃を与えることが出来たのではないかと考えています。

アメリカのリチャード・フロリダ氏は、ピッツバーグのカーネギーメロン大学教授で、「クリエイティブ・クラス」という概念を提唱しました。文字通りクリエイティブ産業に従事するような「創造階級」が集まる都市や地域こそが、経済的に発展する。また、ゲイが多い社会はクリエイティブな人が集まりやすいということにも言及しました。製造業従業者よりサービス業事業者の方が多くなることをサービス経済化というふうに表現していますが、サービス経済の中身が、実はクリエイティブ・クラスに従事する人たちということになるのです。このクリエイティブ・クラスがピッツバーグのような衰退都市からどういった都市を選ぶのか、どういった場所に集まるのかということ調べていった時に、当然、シリコンバレーなどでハイテクの仕事に従事しているのですが、あの当時、ゲイ・インデックスということは非常にセンセーショナルで大統領選挙の争点にもなりました。その後、彼はトロント大学ロットマン・スクール・オブ・マネジメント教授に転身します。

サンフランシスコに新しいアートセンターが出来た時、ホームレスのひとを排除せずアート活動をするのを認めるということをするわけです。いわば「社会包摂」「ソーシャルインクルージョン」が都市を創造的にするという事に繋がるのです。

ユネスコで創造都市を応援する創造都市ネットワークが 2004 年からスタートし、350 の創造都市ネットワークができ、11 の日本の都市が加盟しています。7 つのジャンルがあり、来年からは 8 つになりますが、その全てのジャンルに日本は認定されています。残念ながら大阪は入っていません。

世界の代表的な創造都市について少し話したいと思いますが、私どもが研究を始めた 20 世紀末で、非常に注目されたシンデレラシティーは、スペインのビルバオです。古い造船業が衰退して失業者が増え、まちの再生をアートに託します。新しい現代アート美術館として、グッゲンハイム・ミュージアム・ビルバオをフランク・ゲーリーが設計しました。現代アートは現在と違う価値観を産み、古いカルチャーを変える事が出来る。近くに地元の美術館はあるが、わざわざグッゲンハイムを誘致して新たにアート施設を作った。経済波及効果も大きく、20%あった失業率も 8%に回復することになりました。アート&カルチャーというと、

よくひと繋がりという言葉として使われがちですが、明快な違いがあります。文化には生活文化も含んでいますし、伝統文化から見ると、特に現代アートというのは、一見非常に難解であり、従来と違う価値観を示しています。現代アートによって、古いカルチャーを変えるということを、地元の商工会議所では最初から意図して、わざわざニューヨークのグッゲンハイムミュージアムを誘致したとお話してくれました。現場発の力で、古い文化を変えて新しい仕事をする人たちに集まってもらおうという仕掛けをしたとのことでした。

私は、1999年から2000年にかけて1年間、イタリアのボローニャ大学にいました。ここは、世界で一番古い大学で、1088年に設立されています。国がつくったのではなく、まちに住んでいる人たち、当時、ギルドに属さない普遍的な組織として、学者を招いて勉強したいということで設立されたのが、この大学です。ユニベルシタスとして勉強したいひとがつくったのがこの大学です。英語ではユニバーシティということになります。これに対して、ギリシャの時代はアカデミアです。アカデミアは、学者が集まってつくったもので、プラトンやアリストテレスの時代です。その後、パリ大学などが設立されますが、これは官僚養成所として国がつくったものです。しかしながら、ボローニャは自治の精神が非常に強く、学者というものに対してまちの中での親近感がある。ボローニャ大学本部の前にはオペラハウスがある。私も世界中のいろんな町へ行って、大学を見ているが、大学の正面にオペラハウスがあるのはここだけだと思います。

ラテン語でオペラというのは、音楽のオペラもあるのですが、職人が仕事をするという意味です。お医者さんの手術をオペというのも、職人の仕事という意味からきています。オペラというのは、創造的な仕事という意味なのです。それに対して、奴隷のように働くという言葉がラボーロといいます。ラボーロはレイバー (labor) に、オペラはワーク (work) に繋がります。よくワークアンドライフバランスと言いますが、私はワークレイバーバランスだと言っています。創造的に仕事をするのか、誰かに言われて仕事をするのか。飯のために働かされるというのとは違うのです。オペラハウスで活躍していた作曲家のロッシーニは、音楽で成功した後は、自分が本当に好きだったシェフになったと言われています。

カナダのモントリオールでは、まちの発展をカルチャーと決めて、まちの文化施設を無料開放デーなどで集客します。このまちはフランス語圏なので、北米におけるパリなんです。ここでサーカスを演じる人たちは、オリンピック経験のある体操選手とか、そういう人たちが集まって、肉体的な最高度の演技を見せます。これがシルクドソレイユで、その本部は、カナダ中で一番大きなゴミ捨て場だったところに設置し、ゴミ捨て場の再生とアートを繋げてやる、そういった巨大なプロジェクトになっています。

スペインでもう一つ触れておきたいまちはバルセロナです。モントリオール(カナダ二位の都市)とバルセロナ(スペイン二位の都市)は、日本でいうところの大阪です。創造都市バルセロナは、民主化が遅れたスペインの中で、市民の力で再生した都市です。独裁者政治が終わり、市民の力でまちを再生してきました。バルセロナでは、広場というものを大事にしている、広場で人々が自由に集まって討論し、アートの場に変えていきました。パブリック

クアートといいますが、公園とか駅前にアート作品がある広場では、人が集まって討論することで市民の力が大きくなっていきます。アートの力をまちの中に展開していったのです。

アメリカニューメキシコ州にサンタフェという砂漠の中のまちがあります。人口5~6万人ぐらいですが、このサンタフェがユネスコ創造都市の認定を受けました。サンタフェはネイティブインディアンのまちなのです。サンタフェは文化多様性を大事にする希有なまちということで、ユネスコはあえて現代アメリカを代表するまちではなく歴史あるまちを選んだのです。サンタフェでは、大都市から人々を招いて、地元の人々と会話しながら、ツーリストと住民と一緒にクリエイティブな体験をするという、クリエイティブ→ツーリズムを始めました。

創造都市政策の特徴と成果ですが、第1に、「創造都市政策」、すなわち「文化と創造性による都市再生事業」は、現代アートの力を利用して都市のアイデンティティを回復し、新たな創造産業を生み出し、近隣住民の社会包摂や汚染地区の環境再生など多面的にわたって都市を再生する上で、その有効性を実証しています。第2に、その際、都心文化政策はもとより、都市経済政策、都市開発政策、環境政策の分野との政策統合が重要な課題となっており、芸術文化の持つ創造性を市民のレベルから行政組織のレベルにまで高めて、さらに「都市の創造性」を十全に発揮させるような展望を持った総合政策になっていく必要があります。第3に、このような新しい「創造都市」は公共部門による取組みのみでは実現しません。むしろ、市民やアーティスト、さらには経済界を巻き込んだ横断的な組織によって草の根からの柔軟でオープンマインドな協力体制が機能したときに成功するケースが多くなっています。

日本では、2001年に金沢で創造都市会議を始めます。これが皮切りになり2004年に横浜、神戸、それから札幌、京都などと創造都市が展開していきます。2003年には大阪市立大学に大学院創造都市研究科を置くことになります。2007年には文化庁長官表彰がスタートし、2010年には文化庁が創造都市モデル事業で応援する、文化庁文化芸術創造都市モデル事業が開始します。2013年には、創造都市ネットワーク日本(CCNJ)が立ち上がります。そして、2014年には創造都市に関連する事業として、東アジア文化都市事業が開始されました。

1985年~2000年、私は金沢大学において、経済界や市長さんたちとこれからの創造都市を考えてきました。当時の金沢は、伝統芸能、伝統文化の歴史、町並みを大事にしていました。内発創造都市として、歴史都市と創造都市を二枚看板として金沢は挑戦してきました。

江戸時代、金沢は加賀・前田藩です。江戸・大阪・京から一流の学者・文化人・職人を呼び集め、「天下の書府」との評価を得ていました。今、アーティストインレジデンスという言葉がありますが、金沢では300年前からやっています。第二次世界大戦後、金沢が最初にやったのは、これからは平和な時代になり、美術工芸が大事になるということで、金沢美術工芸大学を1946年に設立しました。そこでデザイン教育をやろうとして、戦後日本のインダストリアルデザインの確立と発展における最大の功労者と言われる、柳宗理先生を迎えます。

現代の金沢の文化政策としては、アンサンブル金沢で、指揮者の岩城宏之先生を迎えたことです。室内楽のヨーロッパ型の音楽は、オーケストラが住むホールがある。そこで練習もするし暮らしているわけです。ところが、日本のオーケストラで専用ホールを持っているところはありません。全部貸し館です。そこで、アンサンブル金沢をつくり、ヨーロッパ型の音楽を体現しました。

山出保市長は、『文化でまちづくり 金沢の気骨』『まちづくり都市 金沢』などの書籍を発刊しています。ひとりあたり文化予算が日本で一番高いのが実は金沢です。彼が市長を辞めた後にぼつりと言ったのは、自分は金沢の文化政策に予算をつぎ込んだけれども、加賀の殿様のようなことはできなかったということです。前田藩は、莫大な予算を文化に使いました。金沢は、文化に予算を使うという素養が出来ている。なので、市民も文化に予算を使っても文句は言わない。大阪などに比べると文化に使う予算が全然違う。過去からの変遷で、文化への理解が金沢にはずっと継続してきたということです。

金沢 21 世紀美術館を作ったことも大きな変化です。これは現代アート専門の美術館です。大阪中之島美術館もオープンしましたが、現代アート専門ではありません。近代アートと言ってもいいくらいです。モダンアートかもしれないが、コンテンポラリーアートではない。それは何が違うのか。美術館の中だけで完結しないような、そういった力がある。特に 21 世紀美術館の初代箕豊館長はじめ歴代館長が、まちなかに美術館を展開するために奔走しています。伝統工芸の枠を取り払って、工芸未来派を提唱するということをやってくれます。こういう形で、金沢は、伝統芸能から伝統工芸、それを未来につなぐという工芸の未来まで展開しており、21 世紀美術館の最大の成果となっています。

今、金沢は工芸文化における日本の首都を目指しています。私が応援していたのは東京にあった国立工芸館の金沢移転です。近代美術館の中にあった工芸館、これを金沢に移転させて、国立工芸館というのが、東京から金沢に移転するお手伝いをしました。文化庁の京都移転と工芸館の金沢移転を推進してくれたのは、当時の文科大臣の馳浩さん、地方創生大臣の石破茂さんです。石破さんの地方創生の考え方を、私は評価しています。そういう実績があるからです。実は地方創生で、日本国内で中央の機関を地方に移そうという動きもありました。例えば、大阪府市は、中小企業庁を大阪にと行っていましたが実現しませんでした。

横浜は、湾岸のウォーターフロント開発の後、バブル崩壊で行き詰まることになり、2004 年にクリエイティブ構想を提唱し始めました。チャールズ・ランドリー氏と私で横浜の中田市長を説得して、この構想を始めることになりました。銀行跡地を BankART センターに変え、青線・赤線地帯をアートエリアに変えるなど、2001 年に開始した横浜トリエンナーレは、第 8 回まで継続しています。

創造的政策を進めるときに、現代アートのトリエンナーレ、ビエンナーレというのは大変有効であるということが分かっています。なぜかというと継続的に人が育つからです。3 年に 1 回あるということは、あいだの 2 年で準備をしているうちに担当者が育っていきます。

第 8 回横浜トリエンナーレのテーマは、「野草：いま、ここで生きてる」。ちょっと小さい

テーマだなどと思いましたが、魯迅の言葉です。キュレーションは台湾と香港のアーティストです。そういった国際的な流れから、トリエンナーレに合わせてパラトリエンナーレというものが出てきます。これは、健常者と障害者が一緒になってパフォーマンスをするものです。これをトリエンナーレに合わせて、3年毎に1ヶ月間実施します。このプロデューサーの方が東京パラリンピックのクロージングの時のプロデューサーをやることになります。

東アジア文化都市というのがあります。第1回は横浜市で開催され、当時、日中関係が悪く、開催出来るかどうかという状況でしたが、国と国は歴史認識や領土問題でぶつかりあうが、都市と都市はそうならないことで実施することが出来ました。今年は石川県の予定でしたが地震で中止となりました。都市と都市のつながりは悠久で、こういったチャンネルが多ければ多いほど平和に繋がっていきます。都市と都市の文化事業は大事なことです。

神戸は1995年の大震災からの復興として創造都市に取り組みます。重厚長大産業に代えて、特にデザイン産業を発展させたいと、デザイン都市神戸を掲げました。そのデザイン都市の拠点施設として神戸生糸検査所というのがあるのですが、明治の日本の輸出産業は生糸です。この生糸を検査して、クオリティを維持して海外に輸出するために、国が作った大きな検査所です。その神戸生糸検査所が現在は、デザインクリエイティブセンターKIITOとなっています。

京都では、西陣で空き町家が増えていきました。放っておくと駐車場になってしまい、まちがどんどん壊れていくことになる。そこで、長屋に若いアーティスト・クリエイターを住まわせようという動きをします。これが京都の創造都市のきっかけになります。当時、行政は古い長屋は負の遺産だから撤去して、新しいビルが出来た方が固定資産税も増えるし、人口増加するという風に考えていました。しかしながら、この町家が残ったおかげで、町家ブームが起きるところから京都市の姿勢は変わり始め、古い小学校の建物を芸術センターにしたり、漫画ミュージアムにしたりしました。この頃から、京都市は、創造都市の考え方を意識しながら、京都文化芸術都市創生条例を作ります。積極的に古い建物を保存し、町家もアートセンターとして活用するということがこの頃から生まれてくることになります。

また、京都信用金庫では、金融機関であるのにまちづくりをやっています。理事長が号令をかけて、クリエイティブタウンを作ろうという動きがあります。かつての河原町支店をQUESTIONという名前のクリエイティブスペースに変えました。ここは、京都信用金庫が運営する共創施設で、人々が集う対話の場であり、気付きや出会いを体験し、地域全体をクリエイティブでイノベーションが起こりやすい場所に変えていこうとする施設です。

伝統産業の再生ということでは、西陣織×パンクということで、西陣織1,200年の歴史上初めて海外進出を果たした細尾株式会社（HOSOO）があります。数々のラグジュアリーブランドのインテリア素材として採用され、西陣織はもはや「HOSOO」として、ラグジュアリーブランドの世界観の演出に不可欠な存在となっています。

京都市立芸術大学キャンパスの移転では、まちなかでの創造的人材の育成拠点としています。この場所は元々被差別部落地区でした。社会の負の側面が内包されるエリアから、芸術

を発信していこうという意気込みを感じ、素晴らしいことであると思います。

文化庁の京都移転では、文化的価値とともに社会的・経済的価値の重視、文化財の保存のみならず活用も重視、文化観光や生活文化の振興、新次元の文化政策ということが掲げられ、京都への文化庁移転が実現しました。

大阪については、早すぎた創造都市ということが言えるかと思います。かつては、難波津の時代があり、四天王寺は社会包摂の機能も併せ持った、いわば世界初のNPOと言ってもよいのではないのでしょうか。太閤秀吉の時代には寺内町としての発展を見せます。関東大震災の直後に、大阪が東京を凌ぐような「大大阪」時代がありました。この時期の市長は池上四郎で、彼は日本で最初に福祉型の都市を作ります。日本で一番早く工業化し、労働争議・公害といろいろな問題が出てきます。それを解決するべく、専門家の力を得てやろうとしました。実は、池上四郎の孫で池上惇という京大名誉教授がいますが、この方は私の師匠の一人であります。池上四郎が、この後の大阪を託したのは、当時、今の一橋大学で社会政策を論じていた関一という学者です。この人を大阪市へ招聘し、大阪市助役を経て市長になり、御堂筋、地下鉄など現在の大阪の礎を築くこととなります。

大阪の北加賀屋では、千島土地(株)によって名村造船所跡地をクリエイティブ拠点にし、大阪創造千島財団による文化芸術活動の支援も実施しています。造船所跡地を30年にわたってアートセンターにするということを言い出して、資財をはたいて、アーティストの支援をしています。さらに、大阪の江之子島には、文化芸術創造センターが開設され、かつて大阪府庁が立地していた場所に創造の場が生まれることになりました。2022年には、大阪中之島美術館が開館しました。現代美術専門の館というわけではありませんが、これからのアート拠点としては期待をしています。

最後になりますが、都市大阪に向けて、やはり創造都市事業の継続的な実施が重要であると考えます。実は、関一の孫にあたる関淳一さんが市長を務めていた際、創造都市大阪という戦略を作る機運があり、私にも依頼がありました。2年間にわたり、大学の授業をやりながら大阪市役所に毎日行き、色々議論していた時代もありました。結果として、創造都市事業は継続していませんが、資産としてはいくつかのプロジェクトは生きているし、民間の中にも創造都市の機運があり、そういったものをどのように再編集していくのがこれから大事になってくると思います。特にこれからの大阪市の行政にとって大事なものは区です。東京都の区と大阪市の区は全く違い、東京都の区は区議会があって、区の独自財源があって、教育委員会も独自の権限を持っています。大阪の場合はそういうものを目指してはいますが、まだ出来ていません。区がもう少し機能するようになりたいと思い、金沢では創造都市会議を作った経験から大阪でも創造都市市民会議を作って5、6年続けたんですけども、継続していません。大阪の問題としては、まだ皆さんにこれから考えて頂く方が良いかと思います。本日はどうもありがとうございました。

【質疑応答】

Q) 今後、大阪が創造都市になるために必要なことはなにか？

A) 基本はやはり市民活動だと思います。大阪は24区もあるが区の権限が弱い。草の根創造都市大阪が大事。前の北区の上野区長は、この大学院の出身で、市民活動を大事にしていた。

Q) 金沢の事例で、工芸未来派を打ち出す際、対立などは？

A) バトルはありました。金沢21世紀美術館は、まちの再生のための美術館にしたいという思いでオープンした。当初、伝統工芸の人は21世紀美術館を良く思っていなかった。市長は、伝統とは絶えざる革新の連続であると説得していた。初代箕豊館長は市内の小中学生を無料招待し、バスの予算も確保した。今、その当時の小中学生が20年経ち、21世紀美術館を支持している。激しいバトルはあったが、どれだけ市民に支持されるかだと思う。

Q) 京都市立芸術大学の事例で、まちの人には必ずしも評価されていない面もあるとのことでしたが、どの部分を評価されて移転に繋がったのか？

A) 当該エリアは高齢化しており、コミュニティは10年20年で消滅してしまう可能性がある。住民の希望を聞くとスーパーマーケットを作ってほしいと言う。それでも10年で結果が見えてしまう。50年先を見ないと行けない。芸術大学が社会問題にある場所にきたらその問題を見て作品をつくることになり、作品に良い効果をもたらすことになる。

Q) 市民活動が大切とのことだが、自治体としてネットワークに入っていないコミュニティでは、どんな市民活動が考えられるか？

A) 市民活動には失敗もたくさんある。普通のまちづくりの集まりだと煮詰まってしまう。そこにアート系の人など普段まちづくりに入っていない人を呼ぶと、最初のうちはアートはまちづくりの道具じゃないとかになるが、地元の人々の不満を聞いているといろんな話がでてくる。アーティストインレジデンスなどもそういう話。変なことを言う人をウエルカムと言えるかどうか。ゲイを受け入れる度量があるか。ということかと思う。

Q) 創造農村で重要なことは？

A) ひとことで言うと「バックトゥーザフューチャーback to the future」。日本の古い暮らしが今に生きるような仕掛けだと思う。

Q) クリエイティビティとは、経済を支える伝統芸能、貧乏で食べていけないアーティスト、ゲイ、クリエイティブ・クラスなど、いろんな人がいることが良いのか？

A) ニューヨークの中でゲイの人が住み始めると乱暴な人がいなくなるというデータもある。最大多数は、実はクリエイティブプアである。その人たちをどうやって応援していくかが包摂型社会だと思う。包摂型創造都市という方向性が大切になる。